

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：50104

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19959

研究課題名（和文）蹴鞠研究：地下鞠技術の復元

研究課題名（英文）Research into the Reproduction of "Jige Kemari"

研究代表者

阿羅 功也（Ara, Koya）

旭川工業高等専門学校・人文理数総合科・助教

研究者番号：90781691

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：今回、再現という手法を用いたことによって、文章だけでは理解できなかった技術を多角的な視点で確認することができた。また、消失した文化、動きの再現という手法を用いたことによって、新しい見解、理解度の幅、議論の材料を提供できるという観点から、学問的な貢献ができ、歴史研究においても身体表現を伴うアプローチが有効であるといえる。また、鞠師の鞠製作伝統手法を最新の技術にて変換し、鞠を独自に製作することができた。これにより再現度も増し、蹴鞠体験会を実施することもできた。蹴鞠の普及に貢献できたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界各国では伝統スポーツが今も行われている。しかし日本の伝統文化「蹴鞠」は日本国民が気軽にプレーできるものではない。こうした背景から伝統が消失する可能性がある。今回で整理した蹴鞠の技術を参考にしつつ、手軽に作成した蹴鞠の「鞠」が整ったことが今回の研究成果である。実践的な研究手法によって、文化の存続に寄与できたと考えている。

研究成果の概要（英文）：This time, by using the technique of reproduction, we were able to confirm the technology which could not be understood only by the text from various viewpoints. In addition, by using the method of reproduction of lost culture and movement, it is possible to make an academic contribution from the viewpoint of presenting new views, range of understanding, and material for discussion, and it can be said that the approach with physical expression is also effective in historical research. In addition, he changed the traditional method of making a mari by a mari player with the latest technology and was able to make a mari independently. This increased the reproducibility of kemari, and it was possible to hold a kemari experience session. It can be said that he contributed to the spread of kemari.

研究分野：体育史 人類学

キーワード：蹴鞠 実践研究 スポーツ用具史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本を代表するスポーツとして挙げられるのは主に「柔道・剣道・空手」といった「道」であるが、日本特有の身体運動を伴う伝統文化として蹴鞠が存在する。伝統文化の中でも「球」を使用する蹴鞠は日本において上記の「道」のような広がりを見せていない。毎年恒例的に「鞠会」が蹴鞠保存会によって開催されるが、実際に蹴鞠に参加できるのは保存会のメンバーである。つまり、鑑賞としての蹴鞠である。この背景には蹴鞠が元々、貴族による家元制度によってプレーするには免許状が必要であったということが大きく影響しているであろう。しかしながら現代において、蹴鞠が「観る」文化から「する文化」へ変容する動きがある。2018年に「けまり鞠遊会」が発足され、蹴鞠を普及する動きが見られ、けまり鞠遊会では蹴鞠使用球の作製方法の提示や蹴鞠体験活動を活発に実施している。そんな中、大衆の蹴鞠「地下鞠」に関する歴史的資料が、村戸弥生氏によって翻刻されていた。『中撰実又記(1646)』である。この資料は『内下三時抄(1291)』等に値するものであり、下巻には地下鞠技術について記録されている。この史料は文字情報のみであるため、蹴鞠を実際に「する文化」に変容させていくためにはこういった技術面での細かな整理が必要不可欠である。

2. 研究の目的

村戸氏の翻刻により、地下鞠研究が飛躍的に進んだといえる。下巻に記録されている地下鞠技術については、文字情報のみでは理解する事が困難であるといえよう。このままでは蹴鞠保存会が公家鞠技術を実際の動きとして取り扱っているような取り組みはできない。そこで本研究では、まさに前述した現状を打破するべく、『中撰実又記』の下巻を現代語訳し、地下鞠技術の再現という手法を用いて視覚化することが目的となる。また、再現の精度を上げるために実際に蹴鞠で使用される「鞠」の製作にも着手していく。

3. 研究の方法

3-1 蹴鞠技術の整理蹴鞠の芸道化から、貴族の蹴鞠である公家鞠が全国的に広がりを見せた。日本において蹴鞠=公家鞠という認識が構築されていった。蹴鞠研究をみても公家鞠に関する研究が大半である。しかし、蹴鞠研究の第一人者である渡辺融氏や、体育史研究者である大久保英哲氏の両者は、蹴鞠が大衆化した地下鞠の存在と、彼らが高度な蹴鞠技術を有していた事実を指摘している。近年、村戸氏が行っている『中撰実又記(1646)』の翻刻により、地下鞠研究が飛躍的に進んでいる。公家鞠は現在、蹴鞠保存会がその様式を保持しているものの、地下鞠の様式や動きは現存していない。当時の地下鞠体験者による発言もないため、実態把握は難しいことが予想される。蹴鞠技術の全体像を把握するために、『中撰実又記(1646)』の文字情報を参考に実際の動きに再現し記録していく。歴史研究における再現という手法を用いた研究はこれまであまりされてきていないが、歴史的資料の全体像を把握するために、実際の技術を身体表現する実践的な研究が必要である。

3-2 蹴鞠に使用される蹴鞠使用球の作製は、動作研究の再現度の向上に不可欠であった。しかしその鞠は夏の雌鹿を使用して製作されていること、鞠を製作するには職人技が必須ということ、鞠を製作する鞠師が少ないという点から希少価値が高い。そこで今回は鞠師である「けまり鞠遊会」池田氏の協力のもと、実際に活用されている作成過程を旭川工業高等専門学校にて

扱われている技術に当てはめ、独自の手法にて蹴鞠使用球を再現(作成)する。この再現により、鞠師の担い手不足の解決に寄与するとともに、蹴鞠文化の存続にも貢献できる。また、今回は北海道にて廃棄問題として扱われているエゾシカ革を使用する。この研究にはけまり鞠遊会の池田氏の許可をいただいている。

3-3 蹴鞠の伝統維持の試み蹴鞠の技術を整理し、手軽に扱える鞠の製作が整うことにより誰しもが蹴鞠を体験する土台が構築される。そこで蹴鞠の体験型ワークショップや体育教材としての蹴鞠を展開し、どのような地域貢献となるか検証していく。

4. 研究成果

4-1 蹴鞠技術の整理

『中撰実又記・下巻』の32項目のうち、20項目を再現対象として抽出し、連続静止画像として記録した。それら20項目の地下鞠技術の再現により、現代語訳だけでは解読できなかった身体的感覚を明らかにすることができた。まず、鞠へのアプローチがすべての技術関係しているほど重要であるということ。そして上半身の臨機応変な使い方が多く確認できたこと。次に、鞠の高下をコントロールするための足使い。最後に、鞠を「落とさない技術」が卓越している点の4つを地下鞠技術の特徴として確認できた。また再現からは『中撰実又記・下巻』は、技術達成の理想系を提示しているのではなく、身体の正しい位置を提示していて、誰しもがこの形を真似すれば習得できる内容であり「技術標本」や「モデル」ではなく、「練習書」、「トレーニングマニュアル」の性質を含んでいることが明らかとなった。今回、再現という手法を用いたことによって、文章だけでは理解できなかった技術を多角的な視点で確認することができた。また、消失した文化、動き再現という手法を用いたことによって、新しい見解、理解度の幅、議論の材料を提示できるという観点から、学問的な貢献ができ、歴史研究においても身体表現を伴うアプローチが有効であるといえる。この結果に今後も議論を重ね、再現のクオリティを上げていくことによって現代に地下鞠の形態を復元でき、大衆に蹴鞠のムーブメントを生んだ地下鞠の面白さや特徴がプレーヤーにどんな価値を与えていくのかを検討できると考えている。また『中撰実又記・下巻』に記載されている残りの項目を再現すること。そのためにはグループでの取り組みも必須とされるため、鞠足の育成が課題である。また、蹴鞠使用球、鞠庭、懸の木といった蹴鞠コンテンツを充実させ、再現していくことも課題である。

4-2 蹴鞠に使用される蹴鞠使用球の作製

鞠師の鞠製作伝統工法を最新の技術にて変換し、安価な鞠を製作していく。その際に用いる機材はレーザー加工機である。このレーザー加工機については旭川工業高等専門学校公式HPにて「レーザー光を用いて、非接触かつ高速、高精度で穴あけ等の金属切断ができる加工器である。薄板金属の切断・穴あけや角パイプ(100[mm]まで)の穴あけ等の精密部品加工が可能である」と説明されている。今回、実験に使用した製品名は『レーザー加工機(アマダ製:Quattro AF1000E)』である。レーザー加工機は革製品に対しても精密な加工を施せるため、卓越した鞠師の技術を再現に適している。けまり鞠遊会へ調査を実施し「鞠師」のもつ技術を「レーザー加工機」に変換するために、「鞠師」のアドバイスをもとに記録したものをデータ化した。そのデータを「レーザー加工機」に入力し、出力をしていく。実験の結果レーザー加工機を使用する新たな製作手法は鞠師の手がけた寸法と比べても誤差のない型取りを再現することが確認できた。今後もより多くの実験を行い、微調整をすることで出力数値をより正確にしていく必

要がある。今回はエゾシカ革を使用し蹴鞠製作に着手したわけであるが、そもそもエゾシカ革が蹴鞠製作に適しているかを検証する必要がある。そこで、3種類の革で引っ張り試験を実施し、革の特性を整理したのち蹴鞠製作を実施している。蹴鞠で使用される鞠が製作可能となったことにより、蹴鞠技術再現研究の精度も高まり、蹴鞠体験会を実施することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 阿羅 功也、澤田 直人、高橋 雄一郎	4. 巻 58
2. 論文標題 蹴鞠使用球の製作	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 旭川工業高等専門学校 研究報文	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24706/asahikawa.58.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 阿羅功也
2. 発表標題 近代工法を用いたエゾシカ蹴鞠使用球の製作
3. 学会等名 第71回日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿羅功也
2. 発表標題 再現という手法を用いた地下鞠技術の研究 - 『中撰実又記・下巻 高足・運び・流し』より -
3. 学会等名 2019年第13回 東北アジア体育・スポーツ史学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿羅功也
2. 発表標題 大衆蹴鞠「地下鞠」の技術復元に関する研究 - 貴族の蹴鞠「公家鞠」技術との比較検討 -
3. 学会等名 第59回大会 北海道体育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------